

全身性エリテマトーデス

免疫が自分の体を攻撃

本来なら体を守る働きをする免疫が、何らかの理由によって自分の体を攻撃する自己免疫疾患。全身性エリテマトーデス(以下、SLE)は、そんな自己免疫疾患の一つだ。膠原病の一種でもあり、古くから難病とされてきた。

日本には約6万人の患者さんがいるといわれており、発病する年齢層は20〜30代が中心。男女比は

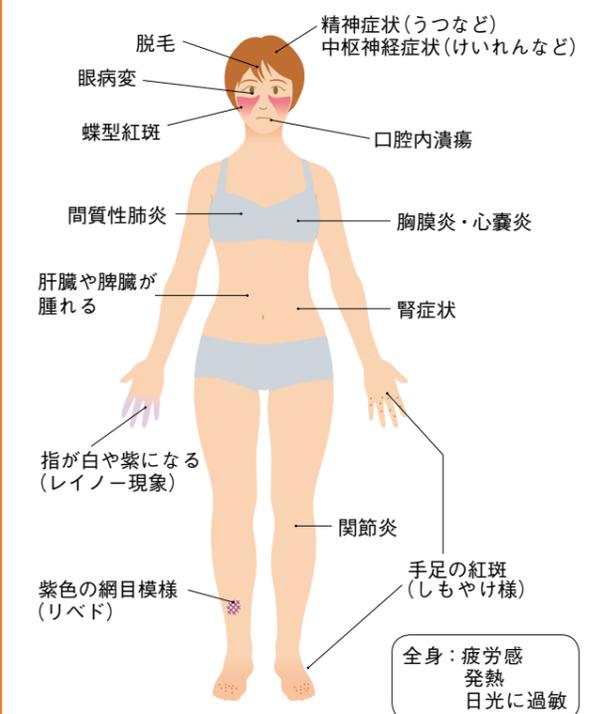
1:10と圧倒的に女性に多く、兵庫医科大学病院に来院する患者さんも8〜9割が女性だ。

全身性エリテマトーデスの名の由来は、頬に現れる蝶が羽を広げたような形の赤い斑点(エリテマトーデス)のほか、全身のあちこちが障害されるところにある。リウマチ・膠原病内科の佐野統主任教授は、「ウイルスや細菌などの外敵が体に入ってくる、免疫細胞であるリンパ球が抗体を作り、外敵を溶かします。しかし、この病気にかかると、同じことを健康な細胞にしてしまい、体の組織を壊してしまうのです」と話す。

関節から内臓まで 症状は多種多様

全身性というだけあり、心臓、肺、腎臓、神経、関節など、症状は内臓を含めた体のあらゆるところに出る可能性がある。「口の中に潰瘍ができる」「髪の毛が抜ける」といった皮膚・粘膜症状、「腎臓に炎症が起こりタンパク尿や血尿が出る」といった腎症状、「うつに

■全身性エリテマトーデスの主な症状



なったり、幻覚が見えたりする」といった精神・神経症状、「胸膜炎や心嚢炎になる」といった呼吸器・循環器症状などだ。

病気の原因はよく分かっていないが、一卵性双生児のどちらか一方がSLEを発病すると、3〜4割の確率でもう一方も発病することから、遺伝的な要因があるとされる。「ただ、遺伝子が全く同じである双子でも7割くらいの人には発病しないわけです。ということは、環境的な要因も大きく関係しているといえます」と佐野主任

専門医にかかることが大事

SLEの症状は、発熱、だるさ、体の痛みをはじめ、いろいろな臓器の異常として現れるため、他の病気との区別が難しい。また、ある人は関節障害だけ、ある人は腎障害だけと、症状の出方も人によって異なる。佐野主任教授は「専門医

が診ないとなかなか判断できない病気ですから、なるべく早く専門医を受診することが大切です」とアドバイスする。

この病気が疑われると、血液検査、胸部X線、心電図など、さまざまな検査を行い、SLEの判定基準に基づいて診断を確定する。

中でも重要なのは、血液検査の抗DNA抗体と補体の数値だ。補体とは、免疫が細胞を壊すときに使われるタンパク質で、この数値が下がると、SLEが活動していると判断できる。

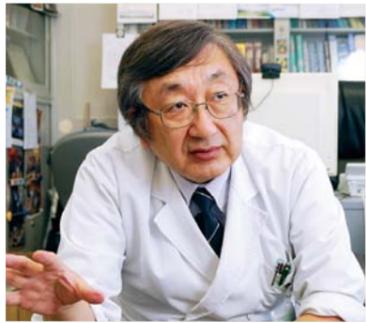
早期診断すれば 怖い病気ではない

一見、SLEは重篤な病気のようにだが、実は5年生存率は95%以上とかなり高い。まれに腎不全などで命を落とすケースもあるが、多くの患者さんは治療によって病気がコントロールされ、日常生活を送っている。有名なところでは、女子サッカーのアメリカ代表として活躍したシャノン・ボックス選手もSLE患者の1人だ。「早期に診断

をつけて治療を始めれば、SLEはそれほど怖い病気ではありませんよ」と佐野主任教授は呼びかける。

治療の基本は、副腎皮質ステロイド薬による異常な免疫の抑制だ。薬の量は、患者さんの重症度や病気の活発度を十分に見極めた上で決定する。重症度が高い場合は、大量のステロイド薬を3日間点滴で投与するステロイドパルス療法が行われる。また、ステロイド薬と併せ、免疫抑制薬が使われることもある。いずれにせよ、以前より副作用はかなり少なくなっているという。

「SLEは、患者さんによって程度がみんな違います。軽い場合、ステロイド薬は投与せず、痛み止めなどによる対症療法になりま



リウマチ・膠原病内科 佐野 統 主任教授

妊娠・出産も。患者さんを支える他科との連携

すし、日常生活に支障がある場合は、ステロイド薬の服用を少量から始めます。一方、重症であれば、ステロイド薬と免疫抑制薬を併用して服用、それでも効果が不十分なら、ステロイドパルス療法や免疫抑制薬の点滴療法を用います。こんなふうには治療してあげれば、SLEを抑えられないことはないんです(佐野)

佐野主任教授によると、ここ最近、シクロホスファミド、アザチオプリンに加え、シクロスポリン、タクロリムス、ミゾリビンなどの免疫抑制薬の使い方が進歩しているという。複数の薬が使えたり、副作用が出たりしたら別のものに切り替えるなど、患者さんの負担を減らしながら効果を上げることができるとのことだ。また、アメリカでは新薬も開発され、期待が高まっている。

「患者さんの間では、ステロイド

薬に対していまだに「怖い薬」という誤解がある」と佐野主任教授。確かに副作用はあるものの、医師の指示通り服用すれば問題はない。逆に、勝手に服用をやめると、症状が以前にも増して悪化してしまうことがあるので注意が必要だ。「治療によって症状が改善すれば、ステロイド薬や免疫抑制薬は徐々に減らしていくことができます。うまく使えば、妊娠や出産も可能です(佐野)

兵庫医科大学病院のリウマチ・膠原病内科では、呼吸器内科、循環器内科、消化器内科、腎臓内科、神経内科などの各内科や、皮膚科、眼科、耳鼻咽喉科、整形外科、小児科、産科婦人科、歯科口腔外科など各診療科と連携し、患者さんを包括的に診療している。特に産科婦人科とは、妊娠患者さんの病状コントロールや、早産や流産の予防に努めている。

「当院で無事に出産したSLE患者さんはたくさんいます。悲観せず、前向きに治療を受けていた方がいいですね」と佐野主任教授は笑顔で話す。